令和３（２０２１）年度　御船町立高木小学校　学校便り

高き志【こころざし】

目指す学校像
**地域とともにある
勢いのある学校**

No. 10（R3．6．16発行）文責 校長 福田雅也

コロナを乗り越え

「天理大学が早稲田大学を破り優勝」

ラグビーに興味がある方ならすぐにピンとくる内容かなと思います。今年の１月１１日、東京・国立競技場であったラグビーの全国大学選手権決勝で、天理大学が早稲田大学を５５―２８で破り、優勝を遂げたのです。関西勢としては同志社大以来、３６大会ぶりの頂点だったそうです。

試合内容としては、開始早々の先制トライを皮切りに、終始優勢に立ち続け一度も逆転されることなく勝利をつかんだのです。しかも初優勝、２連覇を狙っていた早稲田大学を圧倒したのです。

そして、この初優勝は新型コロナウイルスの集団感染、その後の差別的な状 況という苦難を乗り越えてつかんだ、大学日本一の座だったのです。

天理大は前々回は準優勝し、1年前も４強に入り、優勝経験はないものの強豪校の一つでした。新型コロナの感染拡大による昨春の全国的な自粛期間が明け、練習を再開したのが６月でした。練習の強度を上げ、実戦練習を増やす時期にさしかかっていた８月、部員の中にクラスターが発生したのです。感染者は部員１６８人のうち６２人にまで広がってしまいました。活動休止を余儀なくされ、寮は閉鎖され、夏合宿も中止になりました。主将の松岡選手はじめ、多くの選手は実家に帰るしかない状 況でした。そのころの気持ちを松岡選手は「練習が出来ず、ものすごくつらい日々だった」と語っています。そして、コロナ感染の怖さは、この状 況に留まらないところなのでしょう。心ない声が選手たちに追い打ちをかけたのです。「寮内での鍋宴会が集団感染の原因」「天理大ラグビー部って全員何を考えているんだ」SNS上にはデマや中 傷があふれ、大学には謝罪を求める電話やメールが相次いだそうです。「しばらく（アルバイトの）出勤を見合わせてほしい」「（学生の）教育実習を中止にしてほしい」部員ではない学生たちまでアルバイト先や教育実習の受け入れ先から差別的な扱いを受け、学長と天理市長が記者会見を開いて是正を訴える事態になりました。

支えになったのは、ファンやラグビースクールの子どもたちから届いた応援の手紙や動画だったそうです。「お身体の調子はいかがでしょうか」夫が天理大の出身で兄がラグビーをしていたという女性の手紙は、このような文で始まっていたそうです。「コロナのえいきょうで小学校は、行事がたくさんなくなりました。大変だと思いますが、がんばってください」小学５年の児童の手紙は、楕円球のイラストとともに、そのように書いてあったそうです。

「恩返しのためにも」天理大の選手は一丸になっていました。その思いがプラスの力となり、初優勝につながったのでしょう。

一連のこの出来事から様々なことを考えさせられました。プラス面としては「コロナを乗り越えた強さ」「スポーツの素晴らしさ」「思いやりの心とそれに答える気持ち」等です。スポーツという筋書きのないドラマの中で、人の強さや温かさを感じることができる素晴らしいエピソードだと感じます。

半面、マイナス面として「コロナ感染者に対する差別的な言動の存在」という悲しい現実を感じざるを得ません。人は弱いものです。身近に恐怖が近づくと自分のことしか考えられなくなり、根拠もなく差別的な言動をとってしまうことがあります。私たち教師は、自分の学校の子供に感染者が発生した場合、病としての対応や心配は当然ですが、この面への対応や配慮がとても重要になってくると考えています。実際に町内で感染者が発生した学校では、この面の対応や配慮にとても力を注がれました。全校的に「コロナを正しく知ること」「感染した人の気持ちを考え、寄り添うこと」等を、改めて授業として取り組んだ学校もあります。

本校は、６月２８日から７月９日の期間を人権旬間と設定しています。この期間は、各学年がそれぞれ選んだ教材により、計画的に人権学習の授業を行う予定です。このような機会をしっかりと生かしながら、日頃から子供たちの人権感覚を磨き、差別をなくす立場に立つことができる子供たちを育てたいと思っています。同時に、万が一感染者が出た場合の対応や配慮について、先行事例からしっかりと学びながら、備えておかなければならないとも強く感じています。

みんなでコロナを乗り越えるために…